

物 語 文 學

池 田 龜 鑑 著

日 本 文 學 大 系 (8)

河 出 書 房

日本文學大系
第八卷
學 文 語 物

昭和二十七年六月十日印刷
昭和二十七年六月十五日發行

定價 二百四十圓
地方定價 二百五十圓

著 者 池田 龜鑑いけだ かん

發行者 河出 孝雄かわいで こうゆう

發行所 河出 書房かわいで しょぼう

振替東京一〇八〇二番
電話神田(25)二三五一番
三一七四番

印刷者 草刈 親雄
東京都新宿區市ヶ谷台町一

中央製本印刷株式會社印刷

新版はしがき

「日本文學體系」が企畫され、その一部として「物語文學」を執筆したのは、十四年前のことである。そのころ國際情勢は日々に悪化し、防空訓練がはじめられてゐたが、舊版はさういふ情勢下に成つたのである。このたび新版が出ることになつたが、わたくしの見解は相當變化してきてゐる。舊版を執筆した時は、國論が戰爭に向つて驀進してゐた時代であつたから、敗戦といふ苦杯をなめた今日では、さうした變化の生ずるのは自然である。しかし、舊版は五版を重ねたので、相當廣く讀んでいただいたやうであるし、今日行はれてゐる俊英の卓説も、あるひはかの舊版を一應はふみ臺にされてゐるかも知れない。わたくし自身も舊版の「はしがき」においてのべた古代物語研究の三分野——歴史的、様式的、本質的のそれぞれにわたつて、わたくしなりの前進をなしてゐないわけでもないのであるが、今はことさら筆を加へたり削つたりして偽裝するのも卑怯のやうな氣がする。よいにせよ、悪いにせよ、十四年前の自分の本當のすがたをさらけ

出して、かの舊版が果たした歴史的役割をもう一度批判していただき、自分自身も反省してみたいと思ふ。さういふ氣持から、誤植を正し、誤解を受けさうな箇所をわかりやすくする程度に少し手を入れ、他は一切訂正補筆をしないことにしたが、ただ各章の終りに「補註」といふ項を加へ、必要な事項を追記しておくことにした。

昭和二十七年四月八日

著 者

第一版はしがき

「物語文學」については少くとも三つの研究對象の設定が可能である。その一は史的發展であり、その二は「もののあはれ」であり、その三は様式である。三つの中私にとつて最も興味の多いのは史的發展である。しかしこの仕事を三百枚でなしとげるといふやうな放れ業は一寸思ひかけられない。未熟な學力では竹取物語一つを覗くだけでも三百枚位の紙は費ひ果してしまふであらう。そこでこの題目は殘念ながら斷念せざるを得なかつた。次に「もののあはれ」は、平安時代の文學特に物語文學に於て抽象されてゐる理念であり、それは諸作品を十分に味讀し理會し悟了した上で把握される所の純粹なものの純粹な體系化であつて、所謂 subjektologisch な方法によつて進められるべきものである。ところが現在の私は、まだ作品の理會さへも自信のもてない修行途上の一學究である。今にはかにそのやうな大望を抱くとしても、所詮は獨善的な鑑賞主義に溺れること必定である。そこでこの題目も敬遠せざるを得なかつた。次に様式論は、作品のあ

りやうの觀察、即ち objektologisch な方法によるべきものであり、もののあはれ論に比して數等客觀的であり、その題目は私にとつてもかなり魅惑的であつた。しかもそれは文藝學的な立場と文獻學的な立場との如何にかかはらず、一度は必ずふれなければならない基本的な課題である。しかも又物語文學に關してはまだ唯一つの樣式論さへ示されてゐないといふ現狀であるから、やればやり甲斐のある仕事には相違ない。そこで非常な困難を豫想しながらも、思ひきつてこの未開の領域に立ち向ふ決心をかためたのである。

樣式論の考察に於て、私が先づ第一につまづいたのはどう體系を立ててよいかといふことであつた。Moulton の Literary Morphology は好論文ではあるが、さればといつてすぐこれを日本の物語文學樣式にあてはめるわけにも行かない。色々なものを調べ出すと、いつになつたら脱稿するか見透しもつかない。いつそのこと自分自身の體系で行かう、參考書はかへつて見ない方がよい、これまで十三年ばかりの間、ともかくもこの物語文學研究の一すぢに専念してきたといふ、ただそれだけの自分の力量と信念とを頼りに、獨力でまつしぐらに突き進んで見ようと決心をしたのである。かうして八月二十四日から三十日まで一週間、一室に籠居して他との交渉を絶ち、専心筆を執つて、やうやく成つたのがこの書である。これが學術的であるか否かは私自身に

も分らない。ただ戦場に立つたつもりで一生懸命にやつたといふこと以外には、何等の自信もないのである。

しかし正直な所を云へば、私はこの小論で、物語様式を足場として、そこから他の諸様式の全體系に互る新しい展望の眼を向け直す絶好の機会を得た。この展望は、貧しい一生を日本文獻學に捧げ、そこに朽ちて行かうと念じてゐる私には、實にこの上もなく有がたい經驗であつた。といふのは、物語様式に關するあらゆる問題の設定と、その體系化とに全努力を集中することによつて、他の文學様式全面にわたる視野をひろげ、文獻學の意義をより一層はつきりさせることが出來たし、又文獻學者としての世界觀的地盤をなす所の Karl Schulze-Jahde の所謂 das Psychische (心的なるもの) と das Physische (物的なるもの) との相關概念を明確にし、今後文獻學者として少くとも動搖することだけはあるまいといふ、さういふ信念を更に一層強化することが出來たからである。して見れば一週間はおろか、一ヶ月の、一ヶ月の、道草を食つたとしても決してをしくはないわけである。

十年ばかり昔、ある所でこの書と同じやうな立場から日本文學史を講じたことがあつた。この書の筆を執つてゐる中、ふとその當時が思ひ出されて、青年の日にのみ經驗し得られるやうな若

若しいものさへ感じられた。私はこれから再びあのかび臭い古寫本に埋れた書齋に歸つて、又こつこつといつもの仕事をつづけて行かうと思ふ。

この書には各章各節の終にかなり詳細な註が附記してある。この註は、形式・内容とも本書の一つの特色をなすやうに、本欄と同様の苦心を拂つて成つたものであるが、これは本欄の脱稿後本日までの三日間、文學士松村誠一君が獻身的な努力を傾けて私を援助して下さつた成果である。ここに記して感謝の意を表する。

昭和十三年九月二日

著 者

目次

一 物語樣式論	一三
---------	----

(一) 序 說	一三
---------	----

(二) 物語樣式の史的發展	一八
---------------	----

I 物語樣式の發達	一九
-----------	----

1 物語の母胎	一九
---------	----

2 上代敘事詩的文學	二六
------------	----

3 事實譚	三一
-------	----

4 和歌的小話	三五
---------	----

a 原始的和歌小話	四二
-----------	----

b 日記的物語	四六
---------	----

c 和歌的說話……………四

d 歌物語……………四

II 物語樣式的確立……………五

二 物語本質論……………六

(一) 物語形象……………六

(二) 物語樣式と他の諸樣式との相關性と獨自性……………七

I 抒情詩との關係……………七

II 自己示現の文學との關係……………八

III 戲曲との關係……………九

(三) 史的發展の下に見た諸樣式の關係……………九

(四) 物語樣式的本質……………一〇

(五) 物語樣式の體系……………一二

三 物語構成論……………一五

(一) 作者……………二六

(二) 素材……………二七

(三) 物語の機構……………二七

I 主題……………二七

II 筋……………二五

1 構想……………二七

2 敘述……………二七

(附 録)

物語と道德の問題……………一七九

物語文學

池田龜

鑑

一 物語樣式論

(一) 序 說

我々は「物語」といふ言葉の意味を二つの異なる立場から規定することが出来る。その一は、既定の文學史的慣用に基く場合であり、その二は、さういふ舊い約束の一切から離脱して、作品の本質や形態に即して自由に考察する場合である。

慣用的な意味での「物語」は、ある特定の時代、詳しく云へば平安時代から鎌倉時代にかけて（特に平安時代に）制作されたある特殊な樣式、詳しく云へば敘述的形態をもつ所の作品群を意味する。このやうな命名は、必ずしも作品の本質に對して嚴密であるとは云へない。何となれば、それ等の慣用的命名法は、先づ他の時代の「物語的」なる總ての作品を完全に包擁するものではないばかりか、同時代の敘述的作品に於てすら、その中の或るものを不用意に除外してをり、次に

それにもかかはらず、所謂「物語」の範疇下に位置せしめることの少くとも自然であるとは思はれないやうな作品をば自己の組織内から完全に排除し得てゐないからである。例へば、「物語」といふ名稱は、中世及び近世に於て「草子」^{*1}とか「讀本」^{*2}とか「小説」とかよばれてゐるやうな同性質の作品には及ばし得ない時代的制約を如何ともなし難いのである。又「物語」は伊勢集や、加茂保憲女集や、建禮門院右京大夫集等のやうな家集の敘事性、蜻蛉日記・更級日記・讃岐典侍日記のやうな日記の敘事性に對してはほとんど考慮してゐないのである。又篁物語・平中物語・多武峯少將物語・和泉式部物語等に見られるやうな家集的・日記的性質に對しても何等明確な解釋を下し得てはゐないのである。これ等によつて、我々が普通「物語」とよび慣はしてゐるものは、決して形態論的に嚴密な吟味を経た文學の一類型^{ジャンル}の名稱ではない。その名稱は、もと何人かが假りにつけておいたものが、後多少の改修を歷て、そのまま今日一般に通用するやうになつたものにすぎない。云はば便宜上の名稱にすぎないのである。

このやうに、慣用的な意味での「物語」は、名稱としてはきはめて漠然としてをり、曖昧であり、部分的であるが、しかし、長い間國文學史上の作品の分類などに普通の術語として用ゐられ、そのまま廣く一般に承認されて今日に及んだものである。従つて「物語」といふ名稱の中には、